

2026 年知財情報フェアにおける ローカル LLM 活用

知財特化型ツールの展示発表と考察

調査基準日 2026 年 9 月 17 日

GPT-6 Astra

1 調査の範囲と主な結果

2026 知財・情報フェア&コンファレンスは、2026 年 9 月 16 日から 18 日まで、東京ビッグサイト 東 3 ホールで開催される。本稿は、主催者の出展者・製品・セミナー一覧、出展企業の公式資料、比較用の 2025 年公式出展情報をもとに、ローカル LLM を活用する知財・特許分野のツールと今年の展示・発表の特徴を整理する。情報の基準日は 2026 年 9 月 17 日とし、9 月 18 日の発表は予定として扱う。[1]

公開資料でローカル／オンプレミス処理を明示している中心的な事例は、アイビーリサーチの AIPs、トランスエヌの N-Patent、アイパクトリの IPEDIT invent である。未公開の発明情報を社内で扱い、発明届出書や特許明細書の作成を支援する製品が具体化している。実行環境は個人 PC、専用ハードウェア、企業内システムに分かれ、AI が担当する作業範囲にも違いがある。[2][3][4]

一方、特許特化型の独自 LLM、プライベート AI、国内ソブリン環境を掲げる関連展示もある。これらは、利用者の PC や社内サーバーで推論するローカル LLM と同じものとは限らない。本稿では、モデルの専門性と推論の実行場所を分けて評価する。

以下の「確認」は、出展者やメーカーが公開資料に明示していることを指す。現地での動作検証や未公開の講演資料に基づく評価ではない。また、メーカーの性能・効果の説明と、第三者による検証結果を区別する。

2 ローカル型として明示された主な展示

表 1 ローカル型製品の比較

製品と出展者	明示された実行環境	対象業務と主な特徴	ブースと出典
AIPs アイビーリサーチ	オフライン PC CPU で動作	発明提案書、請求項、実施形態のドラフト。 図面・化学式の画像入力、段落単位の生成。	3-I20 [2]
N-Patent トランスエヌ	完全オンプレミス ハードウェアと提供	整理済み請求項と発明資料から明細書本文を 作成。請求項の設計は弁理士が担当。	3-H30 [3]
IPEDIT invent アイパクトリ	企業内に構築する オンプレミス型	発明届出書・発明提案書の作成支援。研究開 発段階の発明情報を整理・文書化。	3-B30 [4][5]

アイビーリサーチの AIPs

AIPs は、手元の PC にインストールし、GPT や Gemini などのクラウド生成 AI を使用せず動作すると説明されている。メーカーサイトも、イントラネット／スタンドアロン環境での利用と CPU での動作を示している。GPU サーバーを前提とする企業内 AI とは異なる導入形態である。[2][6]

特許業務への特化については、数万件の登録特許公報を学習させた専用 LLM を掲げ、図面・化学式などから請求項や実施形態のドラフトを生成するとしている。また、数段落ずつ生成し、人が加筆・修正を挟む使い方を示す。基盤モデル、学習方式、パラメータ数、必要メモリ、分野別精度などは、今回確認した公開資料では特定できなかった。「登録公報を学習」という説明から、モデル全体の学習過程まで推定することはできない。[2]

セミナーでは RAG も紹介している。RAG は、登録した資料を参照しながら回答や文書を生成する仕組みである。自社の機密情報や非公開資料を取り込み、図面・化学式から文書を生成する実演が案内されている。公開特許に由来する知識に加えて、当該企業だけが持つ技術情報を利用する点が重要である。[4]

併設する「特許ストーリー」は、Word 上で明細書の作成とチェックを支援するソフトである。符号・名称、図面と本文、数値、化学式の説明などのチェック機能を掲げ、生成 AI と既存の文書処理機能を組み合わせる方向を示している。ただし、宣伝上の品質・速度の表現を、そのまま検証済みの効果と受け取ることはできない。[2]

なお、製品紹介では「AIPs」、セミナー概要では「A-Ipat」という表記が使われている。本稿では製品紹介の表記を採用した。名称・バージョンの対応関係については、導入検討時に確認が必要である。[2][4]

トランスエヌの N-Patent

N-Patent は、人が整理した請求項と、技術論文・図面・発明者へのヒアリング記録などを入力し、明細書本文を作成する専用 AI である。出展説明は、オープンソース LLM を完全オンプレミスで動かす技術を基盤とし、処理を事務所内で完結させるとしている。[3]

重要なのは、権利範囲に関わる請求項の設計を人が担うという、明示的な作業分担である。請求項のドラフトまで生成対象とする AIPs とは支援範囲が異なる。比較する際は、機能数だけでなく、事務所がどこまで AI に委ねたいかを見る必要がある。[2][3]

展示ではデモを案内し、セミナーではハードウェアとの一体提供を掲げている。利用者がモデルや実行環境を個別に組み立てる負担を減らす提案と読める。ただし、N-Patent 固有の搭載モデル、推奨構成、処理速度、価格は、確認した公開資料では特定できなかった。同社の他製品の価格を N-Patent の価格として扱うこともできない。[3][4]

アイパクトリの IPEDIT invent

IPEDIT invent の発表テーマは、オンプレミス型の発明届出書作成支援である。グローバルな大手特許出願企業への導入例、作業時間の削減、技術上の限界や導入時の留意点を紹介するとしている。特許事務所が明細書を書く場面よりも前段階の、研究者の知識や研究資料を知財担当者が扱える発明情報に整理する工程が中心である。[4]

メーカーの現行 IPEDIT サイトでも、顧客の社内サーバー、閉域網、既存の社内モデルの利用を説明している。性能に制約のある社内 AI でも、作業を細分化し、文書構造や検証ルールを加えることで特許業務を支援するという設計思想が示されている。モデルの大きさだけでなく、業務の組み立て方を重視している。[7]

ただし、現在のサイトで紹介する IPEDIT 全体の機能と、今回の IPEDIT invent の展示範囲は区別すべきである。日本語での対応範囲、搭載モデル、導入先の評価条件などは明確ではない。導入実績や時間削減の数値も、公開概要だけでは第三者が再評価できる情報が不足している。[4][7]

3 関連する発表日程

発表内容は把握しやすいよう要約した。同じテーマの複数回開催は、別製品の発表として数えていない。日程は主催者のプログラムと各社の出展案内による。9 月 18 日の発表は調査基準日時点の予定である。[4][8][9]

表 2 関連発表の日程

出展者	発表内容	日時と会場
アイビーリサーチ	特許専用生成 AI と RAG 図面・化学式からの文書生成	9/16 12:35-13:20 P1
		9/17 10:15-11:00 P4
		9/18 12:35-13:20 P2
トランスエヌ	完全オフラインの特許明細書作成 AI	9/16 16:05-16:50 P6
アイパクトリ	オンプレミス型発明届出書作成支援	9/17 10:15-11:00 P5
GMO アイアールディー	IPFM のプライベート LLM と外部 AI 連携	9/16 14:55-15:40 P2
Patentfield	特許調査・分析における生成 AI の新展開	9/16 11:25-12:10 P4
		9/17 12:35-13:20 P5
		9/18 12:35-13:20 P5

4 実行環境を区別して評価すべき関連展示

独自モデルの開発、小規模 LLM の採用、国内でのデータ保持は、それぞれ重要な要素である。ただし、いずれも単独では利用者側のローカル推論を意味しない。次の展示は、ローカル型として明示された 3 製品と分けて整理する。

表 3 関連展示とローカル LLM との関係

展示または製品	確認できた内容	実行環境の評価
GMO IP Flow Manager byGMO	プライベート LLM による社内完結型の AI 活用と、MCP による外部 AI 連携。[8]	社内完結を掲げる。具体的なサーバー配置・モデル構成は公開概要から確定できない。
GMO GMO 知財 AI	国内サーバーで機密性の高い知財情報を扱うプライベート AI。[8]	国内での処理・データ保持という説明。利用企業内での実行を意味するとは限らない。
Patentfield D シリーズ	特許ドメイン特化の独自 LLM を初公開・参考出展。[9]	専用モデルであることは明示。顧客側でのローカル提供は未確認。
リーガルテック AI IPGenius on IDX	小規模 LLM、RAG、VDR を組み合わせ、研究開発・知財情報を活用。[10][11]	モデル規模や安全な情報管理の説明だけでは、ローカル推論と判定できない。

GMO は、IPFM 内での AI 利用と、Claude Code を用いた案件一覧化、費用試算、データ品質検証などを同じ発表で扱う。社内 AI と外部 AI を使い分ける提案として重要である。ただし、外部 AI との連携時に、どの情報がどこへ渡るかは別途確認が必要になる。[8]

Patentfield の D シリーズは、GENIAC-PRIZE で技術新規賞を受賞した先行技術調査支援 AI の開発成果を引き継ぐものと説明されている。同時に、検索式作成、文献・図面の読解、検索集合の整理などを支援する「AI 検索サポート（仮）」も参考出展される。今年初公開という点は明示されるが、完成した一般販売製品としての提供形態や、オンプレミス対応まで確認できたわけではない。[9]

IPGenius も、社内資料と特許情報を結びつける関連事例である。ただし、今回確認したメーカー説明には、小規模 LLM と RAG、VDR の組み合わせは示されているものの、推論処理が利用企業内で完結するとの明示は見当たらなかった。[10][11]

このほか Questel は、特許翻訳データ、独自 LLM、翻訳メモリ、専門翻訳者を組み合わせる発表を予定している。これも知財特化型 AI の動向として重要だが、ローカル実行の根拠は確認できなかった。[4]

5 2026 年の展示と発表の特徴に関する考察

本節は、前節までの公開事実を踏まえた考察である。2026 年の展示を特徴づける点を整理するものであり、すべての機能が今年初めて登場したと評価するものではない。

未公開発明を扱う工程とローカル処理の結び付き

確認したローカル型の中心例では、発明届出、請求項・実施形態の下書き、明細書本文の作成が対象になっている。これらは、研究メモ、図面、発明者へのヒアリング内容など、公開前の情報を投入して初めて十分な支援が可能になる工程である。[2][3][4]

したがって、ローカル実行は、その企業が AI に入力できる情報の範囲を広げ、利用可能な業務を決める条件になる。公開文献の要約と、未公開の研究成果を使う文書作成では、導入の判断軸が異なる。

特許特化の方法の多様化

今回の事例を一括して「特許を学習した AI」と説明するのは不正確である。モデルの学習、参照する社内情報、作業の分割、文書処理・検証という異なる方法で、特許業務への適合性を高めている。

表 4 特許業務に特化する方法

特化する対象	今回見える例	評価すべき点
モデルの学習と開発	AIPs の登録公報学習 Patentfield の D シリーズ [2][9]	特許用語、文書構造、調査課題への適合性
参照する社内情報	AIPs の RAG IPGenius の社内知識活用 [4][10]	必要な資料を正しく参照し、根拠を示せるか
作業の分割と手順	N-Patent の請求項／本文の分担 IPEDIT の業務構造化 [3][7]	人の判断を残しつつ、修正工数を減らせるか
文書処理と検証	特許ストーリーとの組み合わせ [2]	符号、数値、用語、図面との整合性を確保できるか

実務上の価値は、これらの組み合わせで決まる。モデル名やパラメータ数だけでは、知財業務で使えるかどうかを判断しにくい展示構成である。

図面と化学式の入力や社内資料参照の重視

AIPs が図面・化学式を前面に出している点は、文章だけでは説明しにくい発明を扱ううえで注目される。RAG によって過去の社内資料も参照できれば、発明者がすべてを文章で説明し直す負担を減らせる可能性がある。[2][4]

ただし、画像を入力できることと、技術内容を正確に理解できることは別の評価項目である。化学構造、置換基、図面符号、部品間の関係などについて、認識誤りがどの程度あり、人がどこで確認できるかが実用性を左右する。今回の公開資料からは、その精度を比較できなかった。

人が判断する位置を明確にした製品設計

N-Patent の人が請求項を設計して AI が本文を書くという分担、AIPs の段落単位の生成と修正、IPEDIT の作業分解は、それぞれ異なる形で人の関与を組み込んでいる。[2][3][7]

知財実務では、文章が自然であることに加え、発明者の説明、請求項、実施形態、図面、実験結果の間に整合性が必要である。どの判断を人が行い、AI の提案をどこで点検するかが、製品の比較項目として表に出てきていると評価できる。

提供形態と導入対象の分化

PC で動く AIPs、専用機として提供される N-Patent、企業内システムとして構築する IPEDIT invent は、同じローカル系でも導入・運用の前提が異なる。[2][3][4]

PC 型では個人の作業への組み込み、専用機型では設置・保守と事務所内利用、企業内構築型では既存の認証・文書管理・社内モデルとの統合が検討課題になる。この分化は、ローカル LLM を業務用

製品として提供する方法が具体化していることを示す。ただし、処理速度、同時利用数、保守費用の公開情報が不足しているため、費用対効果の順位付けまではできない。

知財管理システムと AI の接続

GMO の発表は、生成 AI の用途を文書作成から、案件管理、費用予測、データ品質の確認へ広げている。既存システム内の情報を使うには、モデルの能力だけでなく、必要なデータへの接続とアクセス制御が重要になる。[8]

ここからは、機密性や業務に応じて社内 AI と外部 AI を組み合わせる運用が想定される。比較時には、プライベート AI 対応という総称よりも、どの機能が、どのモデルを使い、どこで処理されるかを確認する必要がある。

前年からの継続性と今年の評価範囲

2025 年の公式出展一覧にも、アイビーリサーチのローカル CPU で動く明細書生成 AI という説明がある。したがって、ローカル型そのものは前年から存在しており、2026 年をローカル LLM の登場年と位置付ける根拠はない。[12]

今年の公開資料から評価できるのは、用途、入力資料、人との分担、導入形態の具体性である。一方、前年と今年の全製品を同一基準で比較できる資料はそろっていないため、出展数が急増した、精度が飛躍的に向上した、業界の主流になったとまでは判断できない。

6 導入評価に向けた確認点

表 5 実務上の価値を判断するための確認事項

確認項目	今回の展示内容を踏まえて確認したいこと
ローカル処理の範囲	LLM 推論に加え、画像認識、文書解析、RAG 用索引作成も社内で完結するか。
対象分野と日本語性能	自社の技術分野、化学式、数値、長い明細書でどこまで正確に処理できるか。
根拠の追跡	入力資料にある記述と、AI が補った提案を区別できるか。
人の修正負担	初稿の生成時間だけでなく、確認・修正を含む総作業時間が減るか。
実行環境と保守	必要な PC／サーバー仕様、同時利用数、更新方法、保守費用はどうか。
導入実績の評価条件	対象文書数、難易度、評価者、修正後の品質が開示されているか。

登録公報による学習や自然な文章生成だけでは、個々の発明について適切な権利範囲や十分な説明が得られることは保証されない。今回の公開資料では、各製品を同じ課題で比較した第三者評価は確認できなかった。導入判断につなげるには、自社の代表的な案件で、根拠の正確さ、修正後の品質、確認・修正まで含めた総作業時間を測ることが、展示上の訴求を実務上の価値に結びつける評価方法になる。

参考文献

本文中の番号は以下の資料に対応する。参照日はすべて 2026 年 9 月 17 日。公開日が確認できた資料のみ公開日を記載した。ウェブページの名称は、内容を識別できる範囲で簡略化している。

[1] 2026 知財・情報フェア&コンファレンス主催者 2026 知財・情報フェア&コンファレンス 公式サイト。

<https://pifc.jp/2026/>

[2] アイビーリサーチ株式会社 2026 知財・情報フェア&コンファレンス 出展者詳細。

<https://portal.aimeet.jp/events/pifc2026/exhibitors/ex-2awuasg5>

[3] トランスエヌ株式会社 2026 知財・情報フェア&コンファレンス 出展者詳細。

<https://portal.aimeet.jp/events/pifc2026/exhibitors/ex-x8bijext>

[4] 2026 知財・情報フェア&コンファレンス主催者 公式セミナー一覧。

<https://portal.aimeet.jp/events/pifc2026/seminars>

[5] 株式会社アイパクトリ 2026 知財・情報フェア&コンファレンス 出展者詳細。

<https://portal.aimeet.jp/events/pifc2026/exhibitors/ipactory>

[6] アイビーリサーチ株式会社 メーカー公式サイト。

<https://www.ibr.co.jp/>

[7] IPACTORY Inc. IPEDIT Studio 公式サイト。

<https://ipedit.co/?lang=JA>

[8] GMO ブランドセキュリティ株式会社 GMO ブランドセキュリティ、GMO アイアールディーとともに知財・情報フェアで国内ソブリン環境の「GMO 知財 AI」と MCP 連携可能な知財管理システムを展示 2026 年 9 月 2 日。

<https://brandsecurity.gmo/news/post/post-20260902/index.html>

[9] Patentfield 株式会社 2026 知財・情報フェア&コンファレンス 出展案内 2026 年 8 月 31 日。

<https://patentfield.com/news/322#/>

[10] リーガルテック株式会社 AI IPGenius 製品紹介。

<https://www.legaltech.co.jp/ipgenius/>

[11] リーガルテック株式会社 2026 知財・情報フェア&コンファレンス 出展者詳細。

<https://portal.aimeet.jp/events/pifc2026/exhibitors/ex-stvhzacs>

[12] 2025 知財・情報フェア&コンファレンス主催者 Web ポータル展示 出展者一覧。

https://www.expo-form.com/united2025/usr_list.php?exh=6